

夢子は最近、初めてできた彼氏と別れたばかりだった。  
原因は夢子がセックスを楽しめず、むしろ苦痛に感じてしまいそれを避けたから。

初めての彼氏、初めてのセックス、最初は慣れていないからだと思っていた。

けれど回数を重ねても気持ちよくなれない。気持ちいいふりもできなかった。

いわゆる、「不感症」なんだろうな。

と夢子は考えた。

それと同時にこのままでは今後恋人ができたとしてもうまくやっていけないのではないかという不安もでてしまった。

「夢子ちゃん…ですか？」

「あ、はい！」

「こんにちは、マサキです」

「こんにちは、夢子です。よろしくお願いします」

だから、試すことにした。

後腐れないよう、マッチングアプリで知り合った相手とセックスすることにしたのだ。

一般的なマッチングアプリよりもセックス目的の利用者が多いアプリだったと思う。

少し歳上のマサキは中でも夢子の悩みに優しく反応してくれた。

アプリの写真も清潔そうな外見だったが実際会ってもそれは変わらない。清潔感のある男性だ。

初めてこういう出会いをして緊張していた夢子だったが、マサキが予約しているというホテルへ向かう間にゆっくりとそれも解けていった。

「本当に不感症だったらごめんなさい…」

「いいんだよ、そうなら時間までゆっくりお話でもしていよう」

夢子の言葉にマサキは笑って、自然に夢子と手を繋いでくる。

久しぶりの男性の感触に胸が鳴った。

ホテルへ到着するとマサキはフロントへ予約していることを伝え、顔の見えないスタッフが言う部屋へ案内通りに向かった。

二人を密着させるような狭いエレベーターに淡い灯りの廊下。

部屋番号を確かめてから扉を開けて中に入り、もうひとつの扉も開ける。

——部屋に入ったところで夢子は固まった。

「え…？」

部屋の中に二人の男性がいたから。

二人はソファに座っていて夢子を見ると立ち上がった。

「夢子ちゃんだよね？こんにちは、僕はミキヤって言います。よろしくね」

「ショウで一す、今日はいっぱい気持ちよくなるうな♡」

マサキと同じ歳くらいの男性。

柔らかい笑顔のミキヤと名乗る男と、明るい笑顔のシ

ヨウと名乗る男。

夢子はマサキを振り返った。

「あ、あの、これはどういう、」

「ん？『二人で』っていう約束もしてないでしょ？」

「そんな……」

体が強張る。

初めて会った男三人に囲まれてしまっているのだ。

何をされるのか分からない恐怖で夢子の顔は引き攣っていく。

しかしそれを見たマサキは夢子をふわりと抱きしめた。

「大丈夫だよ、怖いことはしない。君を気持ちよくしたくて集まったんだから」

持っていたバッグを取られ丁寧にソファに置かれた。

「ほら、ベッド行こうね」

抱きしめられたままベッドへ連れて行かれる。

優しい手つきだが夢子に選択権はなかった。

ベッドの上に座ると夢子は背後から抱きしめたままのマサキの胸に背をもたれさせられた。

広い胸に体を預けマサキの足の間に座ったまま、前にはミキヤとショウが陣取っている。

これから何をされるのか、夢子はまだ体を硬くしたままごくりと唾を飲み込んだ。

「緊張してるね、無理もないか」

マサキの腕がお腹の辺りに巻き付く。

上半身がマサキの体温に包まれるようだ。

「触られるの怖いかな？手握らせてね」

それからそう言ったミキヤが夢子の右手を掬いあげ大きな手で包んだ。

「あ…」

これも温かい。

緊張で冷えた指先が余計にミキヤの体温を感じる。

「力抜いて、マッサージでもされてると思ってさ」

ミキヤの言う通り、その指が夢子の指を先端から優しく揉んでいく。

爪ごと揉み込まれるとじんわりそこから温かくなった。

夢子の指よりも節くれだった指が丁寧に優しく指を圧迫して。不思議とそれが気持ちよくて。

「ふ、」

夢子は声を漏らすように笑ってしまった。

「気持ちいい？これ」

「ごめんなさい、なんだか本当にマッサージみたいで」  
今度はショウが夢子の左手を掬う。

「じゃあオレはこっちの手をしてあげよっか」  
そちらの手もゆっくりとマッサージされていく。

マサキに抱かれ、両手をミキヤとショウにやわやわと  
ほぐされ。

体がぽかぽかと暖くなり夢子の恐怖心はすっかり薄  
れていた。

固まっていた体も今はマサキに体重を預けきっている。

そのとき、夢子の右の耳元にちり、とくすぐったさを感じた。

後ろを振り向こうとしたけれどすぐそこにマサキの顔があるようでそれは叶わなかった。

手は相変わらず二人にあやすようにマッサージされている。

気のせいかもしれないと思った。マサキの髪でも当たったのかも。  
もと。

けれど次は明確に柔らかいものが耳の輪郭へ当たった。  
微かに風も感じる。これは唇だ。

(…くすぐったいかも)

唇が耳を滑っている。

なぞるように、感触を確かめるように。

(ああ、これ、始まってんだ)

そう思ったら余計にくすぐったくて。

「…、」

体がぴくりと動いてしまった。

すると次は湿ったものがつついてくる。おそらく舌先だろう。

耳の輪郭を上から下へ、つついて、今度は舐め上げるように下から上へ。

「…、っ、」

くすぐったくてしょうがない。

マッサージされている手には意識がいかず夢子は思わず目を瞑って顔を傾けた。

「あ、」

何度か耳を往復した舌がそのまま夢子から離れず首筋へ移動した。

「ふ、う」

そこから今度は首の横を辿り、手で夢子の髪を横へ流しながらうなじへ。

髪の生え際をくすぐるように舌でつついたあと、

ちゅ♡

ちゅ、ちゅ♡

うなじに啄むようにキスをした。

「…っ」

(くすぐったい…！)

ぎゅ、と目を閉じてそれに耐えていると、

「耳、いいんだ？」

「オレたちもしてあげる♡」

夢子の手を手を取ったままのミキヤとショウがそれぞれ空いた耳へ顔を寄せ、

ちゅ、ちゅ♡ちゅ♡

ちゅ、れろ、ちゅ♡



両側から耳たぶを、耳の中を、小さく吸ったり舐めたりし始めた。

「わ、あ、ツ、」

ぞわぞわ…♡

体が震えてしまう。

でもそれだけじゃなかった。

体の中から火が灯るような、熱い感覚が湧き上がってきて。

その感覚から逃げたいような、受け入れてしまいたいような。

ちゅ♡ちゅ、れろ、れろ♡

ちゅ♡ちゅ♡ちゅ♡

「……、あ、あ、…、」

勝手に声が漏れる。

(…からだ、変、かも)

ちゅ♡れろ、れろ、ちゅっ、ちゅ♡

ちゅむ♡ちゅむ♡ちゅ、ちゅ♡

うなじに吸い付かれ、耳を舌先でくすぐられ、舐められ。

そうこうしているうちにマサキの手は夢子の服にかかった。

ワンピースの背中のファスナーが下ろされていく。

解放された背中を風が通って肩から下ろされた布が腰の辺りで溜まった。

「…っ、う、ふ」

くすぐったさのままに時々体を震わせる夢子の首に唇をつけたまま、マサキは夢子のキャミソールごと胸を包み。

「あっ」

夢子の小さく驚いた声など聞こえなかったかのようにその胸をやわやわと揉んだ。

「は、あ……」

くすぐったさに俯いていた視界で、慈しむように動く  
優しい大きな手。

自分の胸がその手の中で形を変えている。

「んっ」

ぞわぞわ…♡

恋人だった人に触られても何も感じなかったのに。

今はそこから生まれる感覚に驚く。

うなじと耳にキスをされ舐められて、下着の上から胸  
を掬われ。

(……乳首、勃ってる)

全身をじわじわと侵食する感覚に、男の手の中で乳首  
が主張していた。

「嫌じゃない？」

両耳を愛撫されている向こうでそう問いかけてくる声  
が聞こえて。

「嫌じゃ、ないです」

素直にそう答えると。

きゅ…っ♡

尖り始めていた先端を優しく指で挟まれるから。

「あ……っ♡」

体が一瞬ガクッと揺れて甘ったるい声が漏れてしまった♡

(あ、あれ、なんか…)

きゅ…♡きゅ♡

「…っ♡あ、♡」

(背中ビリビリして、)

きゅ♡きゅ…♡きゅう♡

「ふ…ッ、♡ん♡」

(体勝手に動いちゃう)

きゅう♡きゅ♡きゅっ♡

「んあ♡あっ♡…っ♡」

強弱をつけて先端を刺激する指♡

そのたびに夢子の体は小さく揺れた♡

「いいね、可愛い声♡」

マサキの手が胸から離れキャミソールまでずり下ろさ

れる♡

その手は背中でブラジャーのホックを外しすぐに夢子から抜き取ってしまった♡

晒される胸♡

既にその乳首は夢子自身が見たことないほど尖りきっていた♡

「今度は直接触ってみよう♡」

マサキは夢子の上半身をきつく抱え直すと、もう片方の手の人差し指でそっと勃起した乳首の下面に触れた♡

「ん、ッ♡」

それだけでそこがじわりと疼き、

すり♡さす、さす♡

すり♡すり♡すり…♡

「あッ♡あ♡あ、はッ♡」

指の腹で撫でられると上半身がビクビクと跳ねる♡

「キスしてみよっか♡」

今度は耳から離れたショウが夢子をキスに誘う♡

頬に手を添え自らのほうへ顔を向けさせると唇が唇に触れた♡

「……♡」

夢子はされるがままに薄く唇を開け、その隙間にすぐにショウの舌が入ってきた♡

れる♡

ちゅぷ♡ちゅ♡

柔らかい唇同士が重なり、合わせるように形を変え、  
れる♡れ♡れ…♡

分厚い舌に舌を絡め取られる♡

すり♡さり、さり、さり、さり♡

すりすりすり…♡

乳首を刺激され肩を震わせながら夢子は懸命にその舌に応えた♡

(…キスってこんな感じだったっけ？知ってるのと違う、気持ちいい、頭ぼーっとする)

れ♡れる♡れる♡れる♡

甘い刺激に下唇が勝手に落ちていく♡

ショウはその下唇をときどき食み、舌を更に絡めとった♡

「僕も夢子ちゃんの乳首触らせてね♡」

「んウツ♡」

空いていた乳首にミキヤの指♡

その指は一瞬優しく触れたかと思えば乳首を上下に撫で、くる、くる、とゆっくり円を描いた♡

「…ッ、ふ♡ん♡♡…う♡♡」

キスの合間に息が漏れる♡

すり♡さり♡すりすりすり♡

ちゅ♡ちゅぷ♡ちゅ、ちゅっ♡ちゅっ♡♡

くるくるくる♡くる、くる♡さす♡さす♡さす♡

両乳首を指先で撫でられ転がされ、舌を絡め取られ♡

マサキに抱きしめられたままの体が熱い♡

夢子は気持ちよさに体を振りながらもマサキの腕にしがみついていた♡

「…もうそろそろ、次行ってみよう♡」

離れたミキヤが正面、夢子の足の中に入る♡

その手はスカートの中に潜り込んできてすぐに下着を抜き取ってしまった♡

「ここもしてあげたい♡いいよね？」

「あ…っ」

「恥ずかしいなら初めはスカートの中でしてあげようね♡」

言ったとおり、体を屈めたミキヤはスカートの中に潜り込んできた♡

手が夢子の足を広げスカートがミキヤで盛り上がる♡

そちらに気を取られた夢子だったがすぐにショウに唇を奪われ視界から外れてしまった♡

スカートの中、ミキヤの手が足を撫で上げて付け根まで辿り着く♡

そしてまだ触られてもいなかったそこへ柔らかい湿った舌が当たった♡

「……ッ！」

びくりと足が跳ねたけれどミキヤはお構いなしに舌の腹で優しくそこを舐め上げ、

「濡れてる♡嬉しいな♡」

嬉しそうな声でそう言うと、今度は舌先をそこを開くように差し入れ♡

れる…お♡



舐め上げた♡

「……っ♡♡」

一瞬、クリトリスを掠めて体が一気に発火したように  
熱くなった♡

れるお♡

「…ふ、ん♡♡」

舐め上げた舌はまた割れ目へ戻り、

れるお♡

「ん…～♡♡」

また濡れた入り口からクリトリスへ舐め上げる♡

「クリ舐められた？気持ちいいだろ、それ♡」

唇を合わせたままのショウと睫毛の触れそうな距離で  
視線が合う♡

その間も乳首はマサキに撫でられたままだし、スカート  
の中ではミキヤの舌がそこを往復している♡

「…ん♡っ♡……、♡♡」

「目もとろんとしてきて…すっげえ可愛い♡舌出してみ、  
吸ってやる♡♡」

体のあちこちを触られる感覚が体を侵食していく♡

夢子がショウに言われるがまま舌を突き出し、それを  
吸われるのと同時に♡

きゅっ♡♡

「んあッ♡♡」

乳首をマサキの二本の指で挟まれ♡

くりくりくりくりくり……♡♡♡

「あ、アっ、あ♡♡」

左右に捏ねられた♡♡

「乳首気持ちよさそうだね♡」

「アッ♡♡あ♡あ♡♡は♡あっ♡」

くりくりくりくりくり♡♡

うなじでマサキの声がする♡

けれど舌を吸われたままでは何も返事ができない♡

そうこうしているうちに今度はスカートの中でそこを  
舐め上げていたミキヤの舌が、

ちろちろちろちろちろ……♡♡♡

クリトリスを重点的にくすぐるように細かく動くから

♡

「んうッ ううう……っ♡♡♡」

夢子は体をピンッと突っ張らせた♡♡

ちゅっ♡ちゅろ、ちゅろ♡♡ちゅうッ、ぢゅ…ッ♡♡

突き出した舌を吸われ♡

くりくりくりくりくりくりくり♡♡♡

勃起していた乳首を優しく捏ねられ♡♡

ちろちろちろちろちろちろ…♡♡♡

小刻みにクリトリスを刺激される♡

「…ッう♡んっ、っ♡う、あ♡アっ♡」

ちゅろ♡ちゅ、ちゅ、っ♡♡ちゅぷっ♡♡ぢゅっ♡

くりくりくりくりくりくりくりくり♡♡♡

ちろちろちろちろちろちろちろちろ♡♡♡

「ア♡、ッあ♡♡んッ♡う♡ッ、あ♡♡…は、ッ♡」

追い詰めるみたいに、それぞれが一定のリズムになる



(これ…気持ちいい、これが気持ちいいって感覚なんだ♡  
♡体熱くて、触られてるところに意識全部持ってかれて♡  
♡頭ぼーっとして♡)

ぢゅっ♡ぢゅぷ♡ぢゅっ、ぢゅっ、ぢゅっ、ぢゅ♡♡

くりくりくりくりくりくりくりくり♡♡♡

ちろちろちろちろちろちろちろちろ♡♡♡

「あ♡あ、あ♡♡あっ♡あ、っ♡ア、っ♡」

（体、変になってる♡ビリビリして手足突っ張ってお腹の奥から熱いのが……♡♡）

ぢゅぷ♡ぢゅぽっ、ぢゅぽっ♡♡ぢゅう♡♡ぢゅ～～～っ♡♡♡

くりくりくりくりくりくりくりくり♡♡♡

ちろろちろちろちろちろちろちろ♡♡♡

「あっ♡……っ、…？♡……、ん、ま、って、……ん、くっ、」

（あ♡♡これ、なに、……やば、……………っ、）

「……………～～～～～ツツツ！！♡♡♡」

どくん♡♡

マサキの体を押し退けてしまいそうなほど夢子の体が跳ねた♡♡

「……ッ、は、あ…、？な、なに、」

心臓が爆発してしまったんじゃないかと思うほど高鳴って、手足が痺れている♡

その夢子をマサキはさらに強く抱きしめた♡

「かわいいね、もっとしよう♡」

「…え、いま、私、イった？これがイクってこと…？」

「まだまだだよ♡」

夢子は初めての感覚に混乱している♡

その夢子をよそに、足の間にいるミキヤが今度は指でクリトリスに触れた♡

触れただけ、なのに♡

「ひ…ッ♡♡」

敏感になってしまったクリトリスには大きすぎる刺激で♡

夢子の体がまた大きく跳ねる♡

「こらこら♡あんまり暴れたらしてあげられないでしょ

♡」

その指はクリトリスを包んでいた皮をずり下げ♡

べろ…♡♡

「うあッ♡♡♡」

生のクリトリスに舌を押し付けそのまま蠢かせるから  
♡

夢子は悲鳴をあげた♡♡

べろ、べろ♡♡

「…、ッ？ま、まってくださ、」

べろべろべろべろべろべろっ♡♡♡

「んああッ♡♡♡」

べろべろべろべろべろべろっ♡♡♡

「ひ、……ッ♡♡う”、あ”、あ♡♡♡」

「これ、このまま連続でイけるんじゃ？」

「イっちゃえイっちゃえ♡気持ちいいこと叩き込んでや  
ろう♡♡」

べろべろべろべろべろべろっ♡♡♡

分厚い舌が押し付けられたままクリトリスを圧迫して  
動く♡♡

刺激される神経の塊から下半身が溶けていってしまい  
そうだ♡

あまりに大きな快感に逃げ出したくなって体を振って  
もマサキの腕からは逃れられない♡

それどころかマサキの手はまた夢子の胸を包んで♡♡

ぎゅっ♡

二本の指で両乳首を挟み♡♡

こりこりこりこりこりこりこりこりっ♡♡♡

責め立てるように捏ねくり回し始めた♡

「ア”っ♡♡♡あ、ッ、やめ、…ッ”♡♡♡はッ”ア、  
あ…ッ”♡♡♡」

クリトリスへの刺激だけでも精一杯だったのにまた勃  
起乳首まで刺激されて♡♡

反射的に背を丸め顎が上がってしまうと、またショウ  
に捕まった♡

「キスしながらイこ♡舌突き出して情けない顔してイク

とこ見たい♡♡」

頭の後ろに手を添えられ唇を重ねられる♡♡♡

(あ♡♡また…♡♡さっきみたいな気持ちいいの、来ちゃう♡♡)

ぢゅっ♡ぢゅぼっ♡ぢゅる、ぢゅるるっ♡♡ぢゅるっ♡♡

さっきよりもきつく吸われる舌♡♡

こりこりこりこりこりこりこりこりっ♡♡♡

大きな手で掬われ強調されたまま二本の指で挟まれ捏ねられる乳首♡♡

べろべろべろっ♡♡♡べろおっ♡♡べろべろべろべろべろっ♡♡♡

皮を根元で押さえ込まれたまま舌で圧迫され鈍く揺らされるクリトリス♡

「は、ア♡♡あ♡♡あ、あ、う♡♡うっ♡♡ん…ッ♡♡♡」

(……きもちいい、きもちいい♡♡♡これ、きもちいい……っ♡♡♡わかつちゃった、これがイくってことな



んだ♡♡♡)

ぢゅぷっぢゅるっ♡♡ぢゅるるるっ♡♡ぢゅぼっ、ぢゅぼ♡♡

こりこりこりこりこりこりこりこりこりっ♡♡♡  
べろっ、べろっ、べろっ、べろっ、べろっ、べろっ♡♡♡

「…………ツ、ふ、あ♡♡♡いくっ♡♡いく…♡♡♡」  
「イクこと覚えちゃったな♡♡」  
「かわいい♡♡舌も乳首もクリも一緒にされて気持ちよ  
〜くイこうね♡♡」  
「じゃあ、仕上げに…♡♡」

ぢゅううううっっ♡♡♡

クリトリスが一瞬にして、ミキヤの口内に吸引されて  
♡♡

「きゃああっっ！！♡♡♡」

ビクビクビクッ♡♡♡

夢子は悲鳴をあげてまた達した、のに♡♡

ぢゅうううっっ♡♡♡

ぢゅっっ、ぢゅうううッッッ♡♡♡

「あッ♡♡♡あッ、ッ、あッ、だめっ、だめ……  
ッ♡♡♡」

ミキヤの口はクリトリスから離れない♡♡

ぢゅううッッ♡♡♡

ぢゅううう～～ッ♡♡♡

「だめええ……ッッ！！♡♡♡」

いったばかりのクリトリスがミキヤの唇に捕まったま  
ま♡♡

快感を叩きつけられてビクビクと痙攣する夢子をマサ  
キは寝かせると、すぐにショウと一緒に勃起しっぱなし  
の乳首に吸いついた♡♡♡

ぢゅうううッッ♡♡♡

「……………～～～～～ッッッ！！♡♡♡」

体が大袈裟にのけぞる♡♡

背中が浮いて喉がそって、足がシーツを蹴った♡♡

ぢゅううっっ♡♡♡ぢゅッ♡♡ぢゅッ♡♡ぢゅッ♡

♡

ぢゅ〜〜〜〜〜ッッ♡♡♡

「う、あ♡♡♡あ♡♡♡あ♡♡♡ア♡♡♡だめっ、  
ぜんぶ、すわな、…ッ、あ♡♡♡あアあ♡♡♡」

突き出した先の勃起乳首を伸ばすように吸い上げられ

♡♡

クリトリスは勃起促進するように口内に吸い込まれる

♡♡

ぢゅッ♡♡ぢゅッ♡♡ぢゅう♡♡ぢゅ〜〜〜〜〜

ッ♡♡♡

ぢゅぶっ、ぢゅぶぶぶッ♡♡♡ぢゅぼぼぼぼぼ

……ッ♡♡♡

「ふ、ッう〜〜〜〜ッ♡♡♡……、だめ、ッ、だめ  
え…………♡♡♡」

全身から汗が噴き出る♡♡

足をピンと伸ばし手はシーツを握り締め♡

背中を浮かせたままぷるぷると情けなく震える夢子♡

クリトリスを吸引していたミキヤは追い討ちをかけるように、夢子の濡れた入り口へ指を挿れた♡♡

「あ……ッ、？」

急に体のナカを触られて夢子は目を見開く♡♡

「ここも気持ちよくなる♡♡」

「あ…、あ……♡♡♡」

ミキヤの二本の指が夢子のおまんこの上側に添えられる♡

その指は押し上げるように上壁を圧迫して、それからゆっくりと前後に動いた♡

「あ、あああ、あ……ッ♡♡♡」

ナカなんて、恋人とするセックスでも感じたことなどなかったのに♡

乳首を吸われクリトリスを吸引され、圧迫されている壁ごとゆるく揺らされると♡

「……ッ！♡♡♡」

じんわりと体の奥から気持ちよくなって♡

乳首とクリトリスへの快感も一気に増幅されてしまう

♡♡♡

「乳首もクリもおまんこも♡全部されちゃうね♡♡」

「普通のセックスじゃこんなことできないんだから存分に味わえよ♡♡」

「初めての大きな快感に歪む顔がたまないんだよね♡」

ぢゅぶ、ぢゅっ♡♡ぢゅぶ、ぢゅぷっ♡♡ぢゅっ♡♡  
ぢゅっ♡♡ぢゅっ♡♡

ぢゅぼぼぼぼっっ♡♡♡ぢゅぼっ、ぢゅぼぼぼ  
っ♡♡♡

敏感な粒を吸われ、吸われたまま唇で揉まれ♡♡

ぐちゅ、ぬちゅ♡♡ぬ、ぢゅ♡♡ぐっちゅ♡♡ぐっ  
ちゅ♡♡ぐっちゅ♡♡ぐっちゅ…♡♡♡

膣壁を圧迫したままの指が濡れたナカを動く♡♡

「あッ、あ♡♡♡んアッ、あ♡♡♡あ、やあッ♡  
♡あッ、あッ♡♡♡んうッ……ッ♡♡♡」

体の全部から気持ちいい感覚が襲ってきて♡♡

夢子がまた絶頂寸前の小刻みな痙攣を見せると♡♡♡

「おまんこでしっかり感じてイって♡♡♡」

ミキヤの指のスピードが上がった♡♡♡

ぐぢゅぐぢゅぐぢゅぐぢゅぐぢゅぐぢゅぐぢゅぐぢゅ  
……！♡♡♡

「あゝッ♡♡♡だめっ、それ、だめ……！！♡♡♡」

のけぞったまま腰を突き出してしまう♡♡

それは無意識に指が気持ちいいところに当たる角度で  
♡♡♡

「いくっ♡♡いくっ♡♡またイクッ♡♡♡……～～～  
～～～ッ”ッ”ッ”！！♡♡♡い、く…………う”ッ”ッ  
”！！♡♡♡」

背中を浮かせ足も爪先立ちになって♡

夢子はまた激しくいった♡♡♡

「夢子ちゃん最高だよ♡」

「いいイきっぷりでこっちまで嬉しくなるな♡」

「さあ、ここからが本番だよ♡おちんぽ挿れてみよう♡♡」

「…………、おち、んぽ、…」

絶頂を繰り返した体は力尽きたようにシーツに沈んでいた♡

汗まみれだし目からは涙は溢れるし、唇を閉じる意識すら働かなくて唇も濡れている♡

その夢子の足をマサキが広げる♡

夢子の膝に手を置き軽く持ち上げると赤く熟れたおまんこが口を開いた♡

「何度もイってほぐれたおまんこ、とってもえっちだよ♡」

優しく笑みながらマサキは腰を進める♡

亀頭が割れ目をなぞり、十分に濡れるとすぐに入ってきた♡

「……ッふああ♡♡」

入ってきた瞬間から♡

割られたおまんこから体中が粟立っていくようだった

♡

じわじわ♡快感が広がっていく♡

「今度は僕とキスしょ？♡」

ちんぽの感触に戸惑う夢子へ、ミキヤが影を落とす♡

近づいてきた唇へ縋るように夢子も薄く唇を開け、入ってきた舌を食んだ♡♡

「いいね、キスただけでおまんこ締まる♡」

ぐぷ……っ♡♡♡

「んッ♡」

ちんぽが更に奥へ♡それから、

ずるる…♡♡♡

「〜〜う♡♡」

亀頭ぎりぎりまで引いて♡

ぐぷっ♡♡

「ッ♡♡」



また奥へ♡

ずるる…♡♡ぐぷっ♡♡

ずるる…♡♡ぐぷっ♡♡

「…ッ♡ん”♡♡あ、ん♡♡」

ちんぽがまだ狭いそこを開いていくように往復している♡♡

「ちんぽ、いい？♡ここも一緒にしてやるっか♡♡」

視線の外でショウの声がして、横から体を抱きしめられたかと思えば♡

れろっ♡♡

乳首に舌を当てられ♡

べろっ♡♡べろっべろっ♡♡

「んっ♡う”♡…ッ♡は、ん”♡♡」

さっきよりも強く舌で弾かれる♡♡

ビリビリ♡♡

背中を電流のように快感が駆けていく♡

「おまんこも正直に反応してる♡乳首も気持ちいいんだね♡♡」

ミキヤの唇が夢子の舌を吸い、ショウの舌が乳首を弾

く♡

夢子はその気持ちよさでおまんこを締めてしまっている  
自覚があった♡中のマサキのちんぽの感触がはっきり  
と伝わるから♡♡

そしてそれが気持ちいい♡

今まで感じたことのない快感を得てしまっている♡

ずるる…♡♡ぐぷっ♡♡

ずるる…♡♡ぐぷっ♡♡

(おちんぽ…♡♡きもちいい、しんじられない♡♡♡)

「もうちょっと奥までいくよ♡」

マサキが快感に浸る夢子の腰を掴んで♡

とちゅっっ♡♡♡

奥まで突いた♡♡♡

「…………ツあ”♡♡♡」

思わず口が大きく開く♡

「気持ちいいんだね♡ここ、もっとおちんぽでキスしよう♡♡」

とちゅっ♡♡とちゅっ♡♡とちゅっ♡♡とちゅっ♡♡  
とちゅっ♡♡とちゅっ♡♡

「ふぁッ♡♡あ”♡♡…ッ♡♡ん、は♡♡あ”っ♡♡」

マサキのピストンに体が揺らされる♡

それでもミキヤは夢子の舌を捕らえたままだし、ショウは乳首から離れない♡

とちゅっ♡♡とちゅっ♡♡とちゅっ♡♡とちゅっ♡♡  
とちゅっ♡♡とちゅっ♡♡

「あッ♡♡…ッ”ん♡♡ん♡♡う”♡♡…ア”♡♡」

べろっ♡♡べろべろべろっ♡♡れろれろれろれろれろ  
れろ…♡♡♡

「う、う”うん”っ♡♡♡…う”、あ♡♡ア”っ♡♡♡」

ちゅっ♡♡ちゅる、ぢゅっ♡♡ぢゅろっ♡ぢゅ、ぢゅっ、ちゅっ♡♡

「ふッ♡♡う”♡♡んッ、あ♡♡んア、あ”♡♡♡」

とちゅっ♡♡とちゅっ♡♡とちゅっ♡♡とちゅっ♡♡  
とちゅっ♡♡とちゅっ♡♡

とちゅッ♡♡とちゅッ♡♡とちゅッ♡♡とちゅッ♡♡  
とちゅッ♡♡とちゅッ♡♡  
また、ピストンが早くなる♡

「んあ” ッ♡♡あ♡♡♡ア” っ♡♡♡あ、ッん♡♡ん…  
ッ” ♡♡♡」

(おちんぼ♡おちんぽきもちいい♡♡奥ピストンされる  
のすっごくいい、かも♡♡♡)

…とちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅ  
ゅッッ♡♡♡

また、早くなる♡♡

「あ” ……ッッ♡♡♡あ、ア” ッ♡♡ん” ッう” ♡♡♡  
ん” ッッ♡♡♡」

(きもちいい…！♡♡舌も乳首ももっときもちよくなっ  
ちゃう♡♡♡これまたイっちゃうやつ…♡♡♡)

気持ちよくて、夢子の足が勝手に開いていく♡♡

かばっ♡とみっともなく全開になって絶頂を前にまた  
シーツを握りしめる♡♡…と、

カリカリカリカリカリカリカリカリカリッッ♡♡♡

キスしているミキヤが空いていた乳首に爪を立て引っ掻き始めた♡♡

「んあアあ” あああ……ッ” ヅ” ！！♡♡♡」  
「多少強くしてももう気持ちいいみたいだね♡おまんこも喜んで♡じゃあ…こっちも♡♡♡」

乳首への刺激で筋が浮くほど開かれてしまった足の中心♡

クリトリスに、マサキが指を押し付けて♡♡

ぐりゅ……！！♡♡♡

と潰した♡♡

「……………〜〜〜〜〜ッッッ！！！！♡♡♡」

敏感なそこを押し潰され、更にそのまま捏ねられる♡  
♡

ぐりゅっ♡♡ぐりゅ、ぐりゅりゅりゅっ♡♡♡

押し潰されたクリトリスがドクドクと脈打っているのが分かる♡

そしてそれすら気持ちいい♡♡

「…ッ” や、あ” ♡♡だめっ！♡♡んあ” あああッ♡♡♡」

「だめ？腰突き出しちゃってるのに？♡♡おかげでちんぽもすごく気持ちいいよ♡♡」

とちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅ  
…！！♡♡♡

また、ピストンのペースが上がった♡♡  
もう逃しようのない、夢子を追い詰める速さだ♡♡  
喘ぎながらも舌を吸われ、乳首を舐め回され、クリトリスを押し潰され捏ねられながら♡♡

とちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅ  
！！♡♡♡

とちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅとちゅ  
！！♡♡♡

ひたすらにちんぽでおまんこを突かれる♡♡

「あッ♡♡あ” っ、ア♡♡♡す、すご、い……ッ♡♡♡  
これ♡♡きもち……ッ♡♡♡」

「おまんこぎゅってなってる♡イきそうなんだね♡♡一緒にイこう♡♡ここめちゃくちゃに突いてあげる…！♡♡」

どちゅどちゅどちゅどちゅどちゅどちゅどちゅどちゅどちゅどちゅ  
……！！♡♡♡

「…………ツ” ツ” ツ” ！！♡♡♡」

ピストンが重くなって♡♡♡

夢子は体を縮こませ♡♡

「い”、く…………！！♡♡♡これ…、イクっ、イクイクイクっ♡♡♡…………あ” ツああああ…ツ” ツ” ！！♡♡♡」

「ああ…すごいよ夢子ちゃんのイきまんこ♡♡搾り取ってくる♡♡♡」

どちゅ♡♡

…とちゅ、とちゅ♡♡

絶頂した夢子のおまんこの奥へマサキが何度か腰を打ちつけ、ずるりとちんぽを抜いた♡

(……ちんぽって、こんなに気持ちいいの？なんで今まで分からなかったんだろ♡♡♡)

解放された夢子はまだだらりと足を開いたまま、余韻で動けない♡

「まさか一人だけ相手して終わらねえよな？♡」

ぐぶ…ツツ♡♡♡

「……………うゝ ツ♡♡♡」

開いたままだった夢子のおまんこへ、今度はショウが無遠慮に勃起ちんぽを突っ込んだ♡♡

ガチガチに硬いそれが一瞬で奥まで到達して夢子はまた喉をそらす♡

「柔らかい壁がちんぽ包んでくれて最高…♡」

また下半身からこみ上げる快感に思わず顔をそらし歯を食いしばった夢子だったが♡



ショウの手が下から胸を掬いそのまま指で両乳首をぐりっ♡と挟むから体が跳ねた♡♡

「んあアッ♡♡♡」

「マジだ♡乳首するとめっちゃ締まる…♡♡きもち～…♡♡♡」

ぐり♡♡ぐり、ぐり♡♡

「ひ、ッう♡♡♡っ、あ♡♡」

上下左右に根元から捏ねられて腰が浮く♡

頭のとっぺんから足の先まで快感が駆け抜けて足の指が丸まってしまう♡

「これ動かないの無理だわ♡♡夢子ちゃんのおまんこ堪能しなきゃ♡」

ぬこ…ッ♡♡ぬこっ♡♡

乳首を捏ねられしなる体♡

その夢子のおまんこへ、ショウは斜め下から突き上げるように腰をスイングさせた♡♡

ぬこっ♡♡ぬちゅっ♡♡ぬちゅっ♡♡

「あ…アッ♡♡♡は、ッん♡♡」

ショウの長いちんぽがさっきとはまた違うところを刺激してくる♡

そして夢子が押し出されるままに喘ぐと頭上にはマサキがいた♡

「今度は俺とキスしよう♡♡キスも好きだよね♡」

夢子の両頬を包み上を向かせると逆さのまま唇に吸い付く♡

「…、すき、キスもすき……♡♡」

素直にそれに応え口を開けると熱くなってしまった舌同士が絡み合う♡

濡れたその感触にうっとり、夢子も舌を合わせる♡

「乳首ぐりぐり♡されてキスされて…、気持ちいい顔してる夢子ちゃんにちんぽ突くのたまんねーわ♡」

ぬ” こっ♡♡ぬ” こっ♡♡ぬ” こっ♡♡ぬ” こっ♡♡

「んッ” ♡♡う” ♡♡♡んあ♡あ” ♡♡あ、ふ…ッ” ♡♡♡」

ぬ” こっ♡♡ぬ” こっ♡♡ぬ” こっ♡♡ぬ” こっ♡♡

「もっと強くしていい？♡♡♡」

ぬ” こっ♡♡ぬ” こっ♡♡ぬ” こっ♡♡ぬ” こっ♡♡

「…ッ、いい、です♡♡して…♡♡して♡♡」

「強く」するのが乳首のことなのかちんぽのことなのか分からなかったけれど♡

夢子がそう返事をするときショウは乳首を引っ張り薄く

なったその皮膚をぐりぐりと左右に捻り♡♡

下半身は腰の当たる音が響くほど強く腰を打ちつけ始めた♡♡♡

ぐりぐりぐりぐりぐりぐりっっ♡♡♡

バコッ♡♡バコッ♡♡バコッ♡♡バコッ♡♡バコッ♡♡  
♡バコッ♡♡

「~~~~~ッ” ツ” ツ” ♡♡♡」

一段と強くなった刺激にキスする舌がゆるむ♡

それを嗜めるようにマサキにきつく吸い上げられ、だらんと空いた口から吸いきれない唾液も漏れた♡♡

ぢゅうツツ、ぢゅぷ♡♡♡れる、れ♡れ♡れる、れる  
♡♡ぢゅう~~~~~……ツツ♡♡♡

食べられるみたいに舌を吸われ食まれ♡

ぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりっ♡♡♡

甘く引っ張られる乳首はその先で捻られ♡

バコッ♡♡バコッ♡♡バコッ♡♡バコッ♡♡バコッ♡♡  
♡バコッ♡♡

とろけていたおまんこに強くちんぽを突き上げられる♡

「う” ツうう……ッ！♡♡♡ん”、う♡♡♡あ”♡♡♡

ア…ツ！♡♡」

お腹の奥、また熱くて気持ちいい感覚が溜まっていく  
♡♡

もうそれがなんなのか夢子にはすっかり分かっていた  
♡

「イきそ？足ピン♡ってしてシーツ握りしめて…♡♡」  
「夢子ちゃん何回もイけちゃうんだね♡すごい才能だ  
♡♡」  
「じゃあ仕上げに、ここも♡♡」

横で見ていたミキヤが夢子とショウの体の間に手を差し込んで♡  
ぬるつくクリトリスの根元を皮ごと圧迫し♡

ぎゅっ♡♡ぎゅっ、ぎゅ、ぎゅうっ♡♡  
揉み込むように刺激する♡♡♡

「…っ！！♡♡…うあ、そ、それ……ッ”、だめ……ッ  
♡♡♡」

「まんこの締めりえっぐい♡♡♡ピストン挿る♡♡♡」  
「女の子だなあ♡♡こんなちっちゃいメスちんぽでここまで感じちゃうなんて♡」

「ここ揉み揉みしててあげるからね♡これでまた全部気持ちよくなっちゃう♡♡」

「っあ♡♡うツツ、ん♡っ♡♡♡」

バコツツ♡♡バコツツ♡♡バコツツ♡♡バコツツ♡♡  
バコツツ♡♡バコツツ♡♡バコツツ♡♡

「う、ん♡ツツ♡♡♡ん♡……！♡♡う、あ♡ツ♡♡♡」

ぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりっ♡♡♡

「はあ♡ツア、あ♡っ♡♡♡」

ぎゅう♡♡ぎゅ、ぎゅむ♡♡ぎゅっぎゅっぎゅッ♡♡♡

「んあ♡ツツ♡♡♡や、あ、ア♡っ♡♡♡あ♡、ア～～ツツ♡♡♡」

そして、ショウのピストンが更に強くなる♡♡

■続きは製品版にて♡